

2023 年度

SMoA Collection -近現代美術 I -

ネオ・ダダとポップ・アート

ごあいさつ

今、世界中で、「持続可能性(サステナビリティ)」の追求が始まっています。その背景にあるのは、このままの社会ではいずれ立ち行かなくなるという危機感です。そして、「このままの社会」の中心を成すのが、アメリカでは 1920 年代から、日本では 1950 年代から始まるいわゆる大量消費社会であることは論を俟たないでしょう。この大量消費社会に対するアーティストたちからのカウンターとして起こったのが、1950 年代から 60 年代にかけての、ネオ・ダダとポップ・アートです。

ネオ・ダダは 1950 年代末にアメリカで台頭した動き。ネオ(新しい)という単語が示す通り、第一次世界大戦当時にヨーロッパで起こったダダとの類似性に着目して名付けられました。ロバート・ラウシェンバーグやジャスパー・ジョーンズに見られるように、既製品を使用するレディメイドという手法、複数の図像を流用するコラージュ、写真を転写しやすいシルクスクリーン(版画の技法の一種)を使うなどして、既成の芸術や美意識への反抗が試みられています。

ポップ・アートは 1950 年代末にイギリスで起こった動き。1960 年代初頭にはその中心はアメリカに移ります。アンディ・ウォーホルがよく知られるように、大量消費社会における大衆文化のイメージやアイコンを大胆に流用し、高尚な芸術と非俗な大衆文化という従来の理解に対して問題提起をしました。

「SMoA Collection-近現代美術 I-」では、滋賀県立美術館のコレクションの中から、ネオ・ダダとポップ・アートの作品と、先行するダダに位置付けられ、後続のアーティストたちに大きな影響を与えたマルセル・デュシャンの作品を展示します。

作家紹介

マルセル・デュシャン

1887年、フランスのノルマンディー地方生まれ。パリの私立美術学校アカデミー・ジュリアンで学び、1915年にニューヨークに移住します。車輪やシャベルなどの既製品を用いたオブジェをレディメイドと名付けて制作しました。1917年に男性用小便器にサインした《泉》をアンデパンダン展に出品し、本来、無審査にもかかわらず展示を拒否された事件は、美術史における大きな出来事として記憶されています。芸術という概念そのものに挑戦するようなデュシャンの制作活動は、コンセプチュアル・アートなど、その後の美術に絶大な影響を与えました。1968年、フランス、ヌイイ＝シュル＝セーヌで死去。

01 作品紹介

《ヴァリーズ》

ヴァリーズ、とはスーツケースのような旅行鞆のことです。旅行鞆に見立てられた箱の中には、デュシャンの主要作品のミニチュア・レプリカ、写真、複製が収納されています。1926年に作品制作を放棄した彼が、これまでの作品を簡単に持ち運べるように、と制作した本作は、平面作品だけでなく、代表作の《泉》(1917)や《彼女の独身者によって裸にされた花嫁、さえも》(別名:大ガラス)(1915-1923)などの立体作品も見ることができます。

作家紹介

ジャスパー・ジョーンズ

1930年、アメリカ合衆国ジョージア州生まれ。サウスカロライナ州立大学に学び、1949年ニューヨークに移ります。そして、54年にロバート・ラウシェンバーグに出会います。この頃から、アルファベットや国旗、数字など奥行きのない二次元の記号を抽象表現主義風の荒々しい筆致で描き始めます。マルセル・デュシャンの影響を受けていた彼は絵画だけでなく、日用品を流用した立体作品も制作しています。

ラウシェンバーグとともにネオ・ダダのアーティストとして活躍したジョーンズは、それまでの抽象表現主義の精神的崇高性に対抗して、具象表現の新たな地平を開き、60年代のポップ・アートへの橋渡しの役割を果たしました。

02 作品紹介

《ナンバーズ》

画面上の11x11マスの中に0から9までの数値が、規則正しく並んでいます。《ナンバーズ》シリーズは、ジャスパー・ジョーンズの代表的な連作の一つです。2次元のイメージであり、単なる記号である数字をあえてキャンバスに描き、絵の具の塊として物質化することで、私たちが常日頃、当たり前のように共有している概念の曖昧(ルビ:あいまい)さを問いかけています。また、画面全体に均等に数値を配置し、中心となる箇所を画面上に作らないことで、絵画の全体性を強調しています。

03 作品紹介

《ノー》

本作は、灰色の画面の前にNと0の鉛の文字を針金で吊るした同題の作品(1961)をもとに制作された版画です。紙を切り抜き、色を施した「N0」の2文字が、版画の上に貼り付けられ、紐部分はエンボス加工に加え、影を添えることで、より立体的に見えるように工夫されています。作家は60年代に鉛筆などものを吊った同系統の作品を制作していますが、本作は文字を扱っているという点で大きく異なります。なお画面右上の白い輪は、マルセル・デュシャンの彫刻《雌のイチジクの葉》(1950)をなぞった輪郭線です。

ジョージ・シーガル

1924年、アメリカ合衆国ニューヨーク生まれ。家業を手伝いながら画家を志し、1949年にニューヨーク大学を卒業しました。1953年にアラン・カプローと出会い、1956年には初の個展を開催します。初期は表現主義的な静物画や人物画を発表していましたが、1961年に石膏を染み込ませた医療用包帯の存在を知り、人体を石膏で直接型取りする独創的な方法で彫刻を制作するようになりました。アメリカの平凡な日常を過ごす人々のリアルな姿を描き出すシーガルの彫刻は、ポップ・アートの文脈に位置付けられています。2001年、ニュージャージー州サウスブランチウィックで死去。

04 作品紹介

《コーヒーを注ぐウエイトレス》

レンジの脇でうつむき加減にコーヒーを注ぐウエイトレス。平凡な日常の風景の一場面が切り取られているような本作は、生身の人体を直接型取りした彫刻と、赤く塗られた木製の柱、既製品のレンジ台で構成されています。リアルでありながら色のない、真っ白な石膏の人体からは、当時の人々の孤独や倦怠感、疎外感が伝わってきます。

ロバート・ラウシェンバーグ

1925年、アメリカのテキサス州ポート・アーサー生まれ。ノースカロライナのブラック・マウンテン・カレッジ等で美術を学んだ後、1953年にニューヨークに移り、ジャスパー・ジョーンズと知己になります。55年頃から、当時主流であった抽象表現主義風の絵画の上に、古タイヤや動物の剥製などをコンバイン(結合)し、高尚な芸術と卑俗な日常を同レベルで融合させる「コンバイン・ペインティング」の制作を始め、ジョーンズとともに「ネオ・ダダ」運動の代表作家として、抽象表現主義とポップ・アートとの橋渡しの役割を担いました。60年代からは写真イメージをシルクスクリーン版画でコンバインした平面作品を主に手掛けるようになり、1982年には滋賀県の信楽で、自ら撮影した写真を陶板に転写した作品を制作しています。この経験は1985年に設立した、海外の芸術家と共同制作を行う団体「ラウシェンバーグ海外文化交流(ROCI)」の活動へと繋がっています。2008年フロリダで死去。

05 作品紹介

《ミュール》

何層かに重ねられた薄い絹布に刷られたイメージが重なり合っていることが特徴の「霧のエディション」シリーズとして制作された9点のうち1点。タイトルの「ミュール」とは、19世紀前半に初めて自動化に成功した紡績機の名前から取られています。この機械の発明によって大量の単純労働者が生み出され、社会の構造に大きな影響を与えました。

作品に用いられているイメージはそのほとんどがロサンゼルス・タイムズ紙の日曜版からの引用です。政治や社会だけでなく、文化やレジャー、ショッピングや広告など、市民の日常生活と密接に結びついた記事のイメージが重なりながら、波打ち、変形している様子は、当時の社会の多様性や複雑性、不安定さを表しているように見えます。

06 作品紹介

《ホーン》

《ブレイク》

《トラスト・ゾーン》

《スカイ・フック》

《メダリオン》

《ストローボス》

(すべて「ストーン・ムーン」より)

ラウシェンバーグは1969年にNASAの招待を受け、フロリダのケープカナベラル空軍基地(当時)から発射されるアポロ11号を間近で見学します。そして、NASAが発表した公式写真をもとにアポロ11号の月面着陸を記念する33枚組の石版画(リトグラフ)のシリーズ「ストーン・ムーン」を制作しました。当館ではそのうち15点を所蔵しています。1960年代末のアメリカは、ベトナム戦争が泥沼に陥るなど、社会は暗い雰囲気にも包まれていました。その中での人類初の月面着陸の成功という、人類とテクノロジーの幸福な結合の象徴に対する人々の熱狂と興奮が、この作品では表現されています。

アンディ・ウォーホル

1928年、アメリカ合衆国ペンシルヴェニア州生まれ。本名はアンドリュー・ウォーホラ。ピッツバーグのカーネギー工科大学で美術を学んだ後、ニューヨークに移り、雑誌の広告やイラストなど商業美術の仕事をしていました。1962年、美術家として実質的なデビューとなったロサンゼルス・フェラス画廊にて、32点のキャンベル・スープ缶の作品を展示し、アメリカの資本主義社会のもとに大量生産された食品の画一性を表現しました。同じ年に制作を始めた「マリリン」は、彼の「死と惨禍」シリーズの冒頭に位置付けられています。以来、有名人の肖像や事故現場の報道写真などを次々に発表し話題を呼びました。写真転写によるシルクスクリーンの技法を駆使して作品を量産し、大量消費社会・情報化社会が作り出す様々なイメージをシニカルに提示しています。また映画の製作やロックバンドのプロデュースなどマルチな活動を展開し、20世紀後半の文化に大きな影響を与えました。

07 作品紹介

《キャンベル・スープ》

キャンベル・スープは安価な缶入り濃縮スープのブランドで、無名時代のウォーホルは「20年間毎日そればかり食べていた」ために見るのも嫌になったそうです。この「量産品が持つ辟易するような感覚」をイメージの反復によって再現しようとしたのが本作品です。イメージには徹底した没個性化が施され、内容物を示すパッケージの文字を除いて10点の違いはまったく識別できません。それは画一化された社会が量産する、名前は異なっても中身はみな似通った現代人自身の似姿であるのかも知れません。

クレス・オルデンバーグ

1929年、スウェーデンのストックホルム生まれ。1936年に家族とともにアメリカ合衆国に移住します。イェール大学とシカゴ美術研究所で学んだのち、1956年にニューヨークに移ります。そこでジム・ダインやアラン・カプローといったアーティストと交流し、1960年から65年にわたって多くの「ハプニング(偶然性を前提とした演劇的パフォーマンス)」を企画、実践するとともに、62年からは「柔らかい彫刻」の制作をはじめ、ポップ・アートの代表的なアーティストになります。見慣れたものを異様なものへと変えていく彼の作品は、1970年代以降は日用品を建造物サイズにした巨大なパブリックアートへと発展しました。2022年、ニューヨークで死去。

08 作品紹介

《「グッド・ユーモア・バー」のかたちをしたアルファベット》

アメリカのユニリーバ社のグッド・ユーモア・バーは、細かく砕いたナッツを表面にまぶしたアイスクリームバーです。これをオルデンバーグはアルファベットの文字の集合体に変えてしまいました。子どもっぽいユーモアと同時に、人体の一部をほのめかす抑制されたエロティシズムと、人間の内臓を思わせるような気味の悪さを同時に漂わせています。現代社会の中でモノが人間になり代わり、人間がモノになる様を捉えた、人間存在に対するシニカルな視線を感じさせる作品です。

09 作品紹介

《ミニチュア・ソフト・ドラム・セット》

オルデンバーグの「柔らかい彫刻」シリーズは、食品や電化製品などを柔らかい素材で模造した立体作品で、見る者に時にファンシーなおもちゃ感覚、時に艶めかしいエロティシズム、そして時には現実が融解してゆくかのような不安を感じさせます。本作品は1967年に実物のドラムと同寸法で作られた《ジャイアント・ソフト・ドラム・セット》のミニチュア版で、200個のマルチプル(複数制作品)として制作されました。なおセットをどのように組み合わせるかは展示者側に委ねられています。

10 作品紹介

《ロンドン・ニーズ 1966》

「柔らかい彫刻」と並ぶオルデンバーグの代表作は、日用品を巨大に拡大した屋外彫刻群です。1966年にロンドンで個展を開催した際、彼は当時流行のミニスカートとロンドンブーツの間に覗く若い女性の脚を元にした野外彫刻群を街中に設置するというプロジェクトを提案しました。本作品は実現せずに終わった本プロジェクトの記念制作品で、等身大の彫刻と版画による21点の企画案からなっています。

作家紹介

ジェームズ・ローゼンクイスト

1933年、アメリカ合衆国ノースダコタ州生まれ。ミネソタ大学で学んだのち、1955年には奨学金を得てニューヨークに移り、1950年代末には広告の看板描きとして働いていました。この仕事の経験が、1960年以降の作品制作に大いに役立っていることが作品からもわかります。1962年に初の個展を行い、以後ポップ・アートのアーティストとして活躍していきます。彼の作品は広告看板のスタイルを踏襲した大胆なクローズアップと省略、そして鮮烈な色彩と輪郭線、何より巨大なスケールによって特徴づけられます。ベトナム反戦運動などの政治的な活動も行なったローゼンクイストの作品には、政治的・社会的な意図も含まれていることがあります。2017年、ニューヨークで死去。

11 作品紹介

《F-111》

本作は、1964-65年、レオ・キャストリ・ギャラリーでの初個展のために制作された油彩画《F-111》を版画にしたものです。元の作品は、会場の壁面サイズに合わせて制作され、304.8×2621.3cmの大作でしたが、本作ではそれを92.5×737.4cmへと縮小しています。画面を横断するように描かれているのは、当時計画されていたアメリカの戦闘機です。作家はこれが軍事的なものであると同時に雇用を創出し、国民の生活を支える経済的なものであると捉えていました。こうした社会状況をアイロニカルに表現しているのです。

作家紹介

ロイ・リキテンスタイン

1923 年、アメリカ、ニューヨーク生まれ。アンディ・ウォーホルと共に、「ポップ・アート」を代表する作家です。1950 年代までは、大学講師や製図などで生計を立てながら、抽象表現主義的な作品を制作していました。1961 年に漫画をそのまま拡大したような作品《見ろよ、ミッキー》を発表し、以後漫画や日用品の広告イメージを用いて、その明瞭な輪郭線や印刷の網目を再現したドット、三原色での色構成など、リキテンスタイン様式とも言える作品を本格的に制作するようになりました。1966 年以降は漫画から、風景や過去の美術作品、アールデコ風の抽象絵画などに作品の主題が移行し、幅広い表現の作品を残しています。崇高なハイ・アートと消費されていくロウ・アートの区別に疑問を投げかけ、様々なアプローチで作品を制作しました。1997 年、ニューヨークで死去。

12 作品紹介

《フット・アンド・ハンド》

リキテンスタインが 1961 年から 65 年にかけて制作した漫画のイメージを主題とした作品の一点。商業漫画の一コマが作品化されており、印刷の網目がドットで表現されています。アメリカの大量消費社会の産物である漫画や広告イメージを引用したこうした作品は、アンディ・ウォーホルとともに「ポップ・アート」を象徴する作品として知られています。ここでは消費される漫画などのロウ・アートと芸術作品としてのハイ・アートの垣根が取り払われています。

13 作品紹介

《積みわら》

リキテンスタインといえば、漫画のイメージの引用、という印象が強いですが、古今の名画の引用も主要な主題の一つです。1969 年のこの作品は印象派のアーティストとして知られるクロード・モネの《積みわら》(1890-1891)を題材にしています。モネはこの主題を異なった時間、季節、天候、それぞれの光で筆触を分割して描き分け、25 点の《積みわら》が残されています。そのうち 1 点を引用したリキテンスタインのこの作品では、筆触は印刷のドットに配置し直されています。

ジム・ダイン

アメリカのオハイオ州シンシナティ生まれ。シンシナティ大学、オハイオ大学で学んだのち、1958年にニューヨークに移り、1959年アラン・カプローやクレス・オルデンバーグらと、日常的な行為を即興的に繰り広げるパフォーマンス「ハプニング」を試み、話題を集めました。一般的にダインはポップ・アートの画家として位置づけられていますが、その作品は典型的なポップ・アートの作品とは少し異なっています。表層的な大衆社会のアイコンをモチーフにしたアンディ・ウォーホルやロイ・リキテンSTEINらとは違い、彼は普段自分が愛用している日用品を描き、私的な世界を描くことで親しみやすさと自伝的な要素を強く感じさせます。また作品には繊細な素描の線や荒々しい抽象表現主義風の筆触などが取り入れられ、日常生活と絵画表現の接近を試み、無機的なまでに感情を排するよう見える他のポップ・アートの作家の作品とは一線を画しています。

14 作品紹介

《シンシナティⅠ》

《シンシナティⅡ》

《シンシナティⅢ》

本作の題名は作家の出生地であるオハイオ州のシンシナティをさしています。画面いっぱい乱雑に描かれた文字は、ダインの家族、友人、知人たちの名前です。彼は、トレードマークであるハートやバス・ローブなど親密さを思わせるものを多く描きました。本作も、画家の思い出と密接につながる人々の名前を並べています。また、ダインは以前ジャン・デビュッフェや子供の描くプリミティヴな絵に惹かれ、街の落書きに近いものを表現したいと思った時期があり、これは彼流の「落書き」とも言えます。